皮膚呼吸

根岸大輔

関節を覆う皮が細かい動作によって引っ張られる

夏のシャツのささやかな汗の膜の下で

やっこのことで息をしている

最前線の臓器、右ひじの皮膚。

虫の息ならまだ気づけるものの

耳をそばだててもわからない

呼吸がしづらくても

皮のうねりが息づかいを届ける

胞子が研究室に掬い

実験器具の散乱する実験室に散る

保存中の和洋折衷の建造物、何かの記念館。

アルマイトの弁当箱のようにそつと鎮座する教室

繰り広げられていた体罰の音は

柱が記憶していると思わせる懐古主義

突然

レコードがなくように響いた

スポーツポルノの夏に

スポーツ飲料の広告が

青だからって青春を彩るように見せかける

駅のポスター

そこからにじみ出ている

「爽快感」で彩られた軽さの違和感の行先は何処、めぐる。